

未来共生セミナー volume **19**



**RESPECT**

Revitalizing and Enriching Society  
through Pluralism, Equity, and  
Cultural Transformation

# 自然の回復、 ひととの共生



大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター  
未来共生イノベーター博士課程プログラム  
人間科学未来共生博士課程プログラム  
「学修証明プログラム」人間科学研究科 未来共生イノベータープログラム  
大学院副専攻プログラム 未来共生イノベータープログラム

---

## 1. はじめに

---

現代社会がグローバル化の名のもとに国境を越えて人・モノ・カネ・情報が絶え間なく迅速かつ大量に移動する中、重要な社会的要請である多文化共生社会の実現を目指して、2013年にスタートした未来共生プログラム (RESPECT) は今年10年目を迎えました。その記念すべき年に今回の未来共生セミナー「自然の回復、ひととの共生」を企画運営したのは、4期生としてプログラムを修了し、未来共生プログラムの特任の教員となった王一瓊さんと佐々木美和さんです。プログラムでは、国籍、民族、言語、宗教、性差や世代間、病・障害歴など文化的・社会的背景のちがいを超えて、互いを認め合う・助け合う・高め合う共生を目指してきました。その中で背景化していたのが、地球や生命といった根源的なものとわたしたちの共生だったのではないかと気づかされました。地震、火山噴火、豪雨による河川氾濫、異常気象など、この数十年、地球があげている悲鳴を感じる事が日常的になりつつあります。そのことと「持続可能な世界を」の掛け声は同じように叫ばれつつあると思いますが、その実現のためにはどうしたらよいのか。現代社会が歴史と向き合おうとしない中、そのヒントは“Back to the Future”にあるといわれています。これは映画の題名ではなく、古代ギリシャで使われていた言葉で、人は背中 back から未来 future に、過去を見据えて後ろ向きに進んでいくということで、どのように過去と直面するかによって未来の方向が定まるということだそうです。その重要な「未来のことを過去に聴く」企画が修了生たちによる今回のセミナーであったように思います。そうした視点からぜひこの記録を読んでいただくと幸いです。

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・未来共生プログラム 特任教授  
榎井 縁

---

### 3. 講師紹介

---

#### 講師 緒方 俊一郎

医療法人仙寿会緒方医院元院長（熊本県球磨郡相良村）。「清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会」共同代表。熊本県球磨郡相良村教育長。1941年、熊本県相良村生まれ。九州大学医学部在学中から水俣病に取り組み、1944年、同学部卒業後、46年に同医院の6代目を継承。介護施設も運営、村の嘱託医や校医などを長年務め、行政にも助言。球磨郡医師会会長や、熊本県医師会理事などを歴任。第7回日本医師会「赤ひげ大賞」受賞。

#### 講師 岩村 義雄

神戸国際支縁機構理事長。「カヨ子基金」創設者。神戸国際キリスト教会牧師。9.11テロ以降、難民支縁、被災者に寄り添う「ボランティア道」や「田・山・湾の復活」を展開。保田茂氏より薫陶を受け被災地では「保田ぼかし」を用いた無農薬有機農法での田圃を被災した幼稚園の園児らと取り組む。海外ではネパール、シリア、北朝鮮など10ヶ国以上で「カヨ子基金」により孤児の施設に取り組んでいる。神戸新聞 KCC 会館講師。エラスムス平和研究所所長。

#### 講師 保田 茂

1939年、兵庫県豊岡市生まれ。83歳。神戸大学名誉教授。専門は食料環境経済学、とくに有機農業論。特定非営利活動法人兵庫農漁村社会研究所理事長。31歳の頃、母乳汚染という事件に触れ50年にわたり有機農業の推進に取り組む。長期にわたり農林水産省の委員を務め、2022年現在、兵庫県下12か所に有機農業教室を開く。毎月12回各教室に出向き指導。兵庫県の農業・農村の活性化方策を探るとともに食育活動にも取り組む。自然生態系の保全、兵庫県で絶滅したコウノトリ野生復帰事業にも取り組む。

何が原因だったかがわかると思うわけですよ。施設でたくさんの方が亡くなったことについても、小川という川が土石流であつたという間に追ってきたわけですから。その前に国土交通省は洪水が起こらないようにと導流堤を作っていたんです。それがかえって今回、邪魔をしたようなところもあるわけですよ。それから、水の流れというのは堤防の内側を流れているのが通常です。ところが、球磨川・川辺川の合流点そばにある施設の周辺でも、堤防の外側を塞がった橋梁で堰き止められた水が流れた。これが人の命に関係したということがあるんです。物事を検証、事実どうであったかということの、事実を見ていくということが少し行政側では、お粗末じゃないかなと思います。したがってその行政を担当している人たちの考え方というのが、どうもその住民側にはあんまり向いてないって。

**学生 1：**個人的な感想ですが、この前、茨城県の東海第二原発について、住民も反対運動を起こして、今日先生の話をお伺いして似ているところもあるかなと思います。今がエネルギー高騰の原因で再発動をしてくださいというのが、国からの強制的な命令です。でも、地元の住民が、福島原発が事故を起こして、再発動に安全性とかで反対運動がありまして。いろいろ似ているかなと思います。自分のフィールドも福島ですので、今日もいろいろ勉強になりました。

**学生 2：**私も大阪で、大気汚染公害被害の患者さんが作った地域作りの団体でバイトしているんですが、同じことが起こっていると思って、繰り返されているよなぁと思っています。その団体ではいろんな連絡会があつたり、患者さんとコミュニケーションとする場所が確かにありますが、目標がちょっとずれて、ちょっと言葉がずれている気がします。行政側と公害問題に立ち向かっている方々の事ですね。最近新しく出てきた化学物質花粉症という形でも割と同じようにうまくコミュニケーションできないし、見てくれるお医者さんも少ない。繰り返されているなぁとひしひしと感じました。

**緒方：**水俣病もね。申請するのにも医者の診断書が必要です。普通の病気は医者が診断すればそのまま通ります。認定申請の基準は向こう側が作っているのです。その認定条件の枠の中にはまらないと認めない。認定外の患者がいるのはまずおかしいです。コロナもそうですけど。極端に症状がひどい人は死ぬわけですよ。罹るか、罹らないかわからない人もいますね。病気の症状はものすごく幅広いわけですよ。水俣病の場合もですね、ひどい人は死ぬわけですよ。軽い人は外見上、全くわからないんです。水銀の量が多くなるとひどくなるというのが一般的にそうです。だけど水銀を取り込んだ人たちが、全部に明白な症状が出るわけではないから、今国が認めているのはこの位（ピラミッドの頂点に近い部分だけ）です。この辺の人たち（その一ランク下の症状がある患者）もね、生活の上では非常に困っている人たちがいるわけなんです。そんな人たちも僕らから見ると、当然認めるべきだと思う。ここの人たちがなんで自分がこんなに具合が悪いかなぁと悩んでいるわけですよ。病院に行くと他の病名がつけられるわけですよ。水俣病を知っている医者がみると、水俣病がバックにあるのではないかと診断すると思います。

**司会：**今日は、川辺川ダムのことだけではなく、そもそもその3名とも大阪大学の博士課程に所属する学生ですが、社会の課題というか、問題としていところで戦っている学生ばかりですので、緒方先生が冒頭でおっしゃってくださった、研究者としてどう生きていくか最初に、（カネミ油症に気が付いた皮膚科の）九大の先生が当時、データをもっと集めてから発表しようという考え方について、学生として批判していたというのも、学生たちは本物の学者というのは何かという、社会的な学者というのはどういう姿勢であるべきかということもすごく力強い話という、聞かせていただきました。ありがとうございます。

## 4.2 神戸国際支縁機構・岩村義雄氏

（農作業の合間に、講師の岩村義雄氏から、なぜボランティアをしているか、話をしてもらうことになった。）

**岩村：**皆さんよく第29次球磨川ボランティアにご参加下さいました。

神戸国際支縁機構の、「しもべ」として仕えています、岩村義雄です。

私は、自分の暮らしが砂上の楼閣であることを今から11年前に実感しました。砂上の楼閣というのは砂の上に建物を建てるというそういう中国の昔の故事の言葉であります。

砂の上に、建物を建てる。ですから倒れてしまう、ということですね。

震災直後にはこのコンビニとかスーパーの棚から食べ物がみな消えてしまいました。ガソリンスタンドは宮城県石巻というところで1時間ではなくて数時間待って1リットル、ということがありました。計画停電という体験もしました。水、電気ガスが途絶えて、そして電気の流す時間帯というのが限定されたわけです。その時に初めて私たちは生きていく上で必要な食べ物、食とエネルギーが誰かに依存しているということが思い知らされます。震災後、11年前、2011年3月から毎月のように東北へ足を運んでいます。

**司会：** 神戸国際支援機構が3.11直後から動き始めた時からの話ですね。

**岩村：** はい。今月で東北は132回目であり、最初に申し上げたように2020年7月の球磨川水害からは29回目です。東北の地震・津波被害で作物が植えられなくなった農地、津波でヘド口をかぶっていて、とても稲とか野菜を植えることができなくなった農地。または港。すなわち、東北の石巻というところは日本一の水産業のメッカ、栄えていた都であります。農業だけではなく漁業もできなくなりました。港や船が失われた漁港、そして林業も同じように後継者がいない。木こりになる人がいない。そうした中で、木を切って薪を作る、そうしたこともできなくなりました。とりわけ、原発事故の現場となった福島避難場所の人たちの話は重くつらいものでした。私たちも2012年福島に入ってみて全く人がいなくなってしまうところで見かけるのは、猪と豚の間で生まれた猪豚<sup>イノブタ</sup>という生き物でした。食べ物がありませんから、それを焼いて食べたらいいのではないかとありますが、放射能残留物が多くて猪豚を食べることはできません。

また実証田として政府は農林省を通して放射能汚染の農地で表土を入れ替えて、稲の生育を試みました。そして翌年にはそこで稲を刈りました。福島はかつて東京の米どころ、同じ東京の人々の胃袋に入るお米の重要な産地でしたが、その実証田でお米をつくってみたところ、やはりセシウムの数値が高くて、とても人間が食べることができない代物でした。その時に、そのことをメディアに取り上げたら、農家の人々たちは、根も葉もない噂をするな、と怒りました。根も葉もない、これは、日本のことわざ表現ですが、しかし、根にも、葉っぱにも、放射能残留物はしっかり残っていたわけです。

私達も、石巻でセシウム134と137をどうやったら取り除くことができるのか、フクシマ原発から車で約2時間離れた宮城県石巻も、やはりセシウム134、137の数値が高かったわけです。そこで農家の人たちは、もう米を作る元気をなくしていたところに、私たちは、ボランティアとして神戸から、若者たちが、車や船などのがれき、ヘド口を取り除き、用水路、排水路を掘り起こしました。コメを栽培できるようにしました。そして、東北大学の農学部と協力して、セシウムをどうやったら、米から取り除くことができるのか。いまや雑草が生い茂っている荒野はかつて田んぼでした。

田んぼの中にはおよそ5800種類の水生物がいます。目に見ることができないプランクトン、植物プランクトン、動物プランクトン。また、英語でキリフィッシュと言うメダカ、魚、ゲンゴロウ、色々な生き物が生息しています。

それらの生きものが、セシウムをやっつけて食べてしまって、人間に害のない、稲を作るかどうかという試みを、東北大学の博士課程を持っている先生たちと共同でチームで取り組みました。しかし、結果としては、イネに残留している、すなわち土中に残留している放射能は、水生の生きもの、動物によっては除去することができないということが2年後3年後にわかりました。

人間の知恵、科学を結集しても、解決できない大きな負の遺産をまざまざと見せつけてくれました。エネルギー源とした原発がずっと子々孫々に至るまで、禍根を残すことをつきつけました。

無農薬有機<sup>いのち</sup>というのは命を育む農法です。

## ●生命と命の相違

**岩村：** ここで確認したいひとつに、「命」という言葉があります。

先ほど、〇〇ちゃん（研修で出会った地元の子ども）が、メダカを、家で飼ってみたらどうかと言ったら、おばあちゃまが、それは、もう、すぐに元のところに、池なら池、田んぼなら田んぼに戻す

ようにしていると仰いました。殺してしまったら可哀想だから。

「命」という言葉は、三通りあります。「生命」「命」「いのち」です。

<sup>せいめい</sup>生命。命、と、ひらがなで書く「いのち」には、違いがあります。おばあちゃん、○○ちゃんに、どの「いのち」が大切だから、メダカを家で飼うのを、やめるようにと教えましたか。

「生命」は、生物用語です。すなわち、ギリシャ語の βίος (ギリシャ語 ビオス *bios* 「(生命を支える外延の生活などの意) から、英語の biology バイオロジーなどの言葉の由来となっています。logy ロジーというのはロゴス、言葉、学問です。

学問の成果の結果、農法について私たちは実験してるのではありません。

## ●命を育む農

**岩村**：「農」とはビオスではなく、ζωή (ギリシャ語 ゴーエー *zoe* 「(根源的エネルギーの) 命」の意) を「育む」のお手伝いをしているのです。

皆さんは博士課程で学ばれると同時に、教育者としての営為を研鑽しておられます。教育するというのは漢字で、「教」える、「育」てると書きます。一方、命を「育む」という視点を申し上げました。

さきほども、田んぼで参加していた年中組の5歳の、○○ちゃんに教育する、という取り組みをしていたでしょうか。教えるというのは幼稚園、学校、塾で、正解を出すことが前提です。2+2は4。3かける3は9。正解を求めて、家庭でも養育、幼稚園から大学まで教育に専念させます。そしてコミュニティ、社会、企業に入ると、成育、つまり成人教育が待ち受けています。

私たち神戸国際支縁機構のボランティアは、養育・教育・成育への取り組みをしません。何をするかというと、「いのち」を「育む」に力点が置かれます。つまり教育する(教え育てる)ではありません。「育む」はたらきに専念しています。教育するっていうのは英語で educate エデュケートです。由来はラテン語の *educatio* エデュカティオです。エデュカティオというのは生徒達、学生たちの、良い資質を引き出すのが本来です。一方的に教師が園児、児童生徒、学生に教え込むのとは異なります。私たちは、農法をする時にエデュカティオをするのでもありません。自然に向かう農法は、良い資質を引き出すという、教育という学問ではないからです。「育む」という最も大切な精神態度に仕えます。「育む」というのはエデュケートではなく、英語フォスター *foster* です。フォスターには、別の意味では世話をするという意味があります。教育するのとはわけが違います。

農業は英語で *agriculture* アグリカルチャーと言います。アグリとカルチャーが合体して、農業という英語に派生しました。カルチャーの由来は、「耕す」カルティベイト (*cultivate*) から派生した言葉です。思想、哲学、宗教の文化は、哲学者キケロが言ったように、人間の心を耕すカルチャーが本来の意味と言えます。ですから、私たちは心、精神、思惟を耕すフォスターに力を入れています。生命(ビオス)ではなくて、命(ゾーエー)の差異を熟考し、実践します。人間を生かしめる。自分で生きていくことができる、そういうゾーエーはギリシャ語 *energeia* エネルゲイヤを育む。育むというのは育てることではないんです。教育をするではありません。例えば、雨が降る、冬には雪が降るを考えましょう。雪というのは、分子では、水と同じように、 $H_2O$  です。 $H_2O$  というのは、結合のそれぞれの分子は液体ではありません。気体です。目に見えないもの。水素と酸素です。水素と酸素が合体したら液体の水になってるわけです。では、訊きます。皆さん教育者ですからすぐお分かりですね。雪が融けるとどうなりますか。どなたでもいいです。

## ●雪が融けるとどうなるか

**岩村**：雪が融けるとどうなりますか。

**学生1**：水に…

**司会**：1人1人言ったらいい？

**会場**：水とほこりですか。

**岩村**：ありがとうございます。雪が融けると「春になります」。この発想が「育む」です。家庭では養育。幼稚園、学校では教育、社会では成育(成人教育)と言いますが頭で理解するのを、論理

的科学的に理解する教育ではありません。「フォスター」、つまり人々を育むというのは知性を詰め込むではありません。すなわち、雪が融けたら春になるという想起は、その価値観の転換。価値観が変わるというのは勉強で理解するものではないんです。頭で理解するんじゃなくて育まれる。すなわち、本当の意味での命、ゾーエー<sup>いのち</sup>というものを目指します。そうした耕作を私たちは農業と言いません。農法と言ったりします。英語のアグリカルチャーは農業ではなく農法と訳します。江戸時代の農法がフォスターです。実際の自分の子どもではない養子を、実の子どものように育てるのもフォスターです。

では先ほど、みなさんが初めてお会いした人々を、野田兄弟、辻兄弟、裕隆兄弟と呼びました。兄弟、姉妹といいます。おかしいですね、そんな呼び方したら。日本では浮いちゃいますよね。日本の社会では、〇〇兄弟なんて言ったら、「ええ、この人たち、おかしい人の集まり、変人の集まりだ」と思われます。しかし私たちは、宮城県の石巻や、また九州の相良っていう地域であっても親になった場合、兄弟、姉妹と呼びかけることだってあるわけです。その時に地元の人々たちはどう思うか。血縁関係でなくても家族のように接しているので違和感がありません。

永遠のベストセラーと言われている聖書の中に、キリストは肉親には用いず、新しい共同体のメンバーにのみ、そんな呼びかけ方をなされたとあります(マルコ 3 章 31-35 節)。

さらに「産めよ、増えよ、地に満ちてこれを従わせよ、海の魚、空の鳥、地を這う、あらゆる、生き物を治めよ」、という言葉があります。その創世記 1 章の 28 節に、「治めよ」、「支配せよ」をどう考えますか。子どもを産んで増えて、地球上の陸地面積 145 億ヘクタールありますが、そこを支配せよという意味ですか。キリスト教は、聖書の解釈を曲解して動物や、自然を、支配する。そして環境汚染、公害を起こしてきた張本人と言えます。「支配せよ」という、聖書の言葉の訳、もともと、ヘブライ語をどう解釈するかです。

私は、ヘブライ語、ギリシャ語の語学教師のはしくれです。語学を教えるときに、私に大きな影響を与えたのはウクライナ人のチョムスキーです。チョムスキーという人は、文章の構造に注目しました。たとえば、日本語であったら「水は冷たい」、「犬は動物だ」、「花が咲く」の三つのパターンがあります。でも、水は冷たい。犬は動物だ、という文には動詞がありません。動詞がなくても、日本語の文章は、できあがっています。英語にしても「水は冷たい」はウォーターイズコールド(water is cold) と、be 動詞が入ります。必ず動詞があります。ヘブライ語は動詞が大切で、動詞三音字に根本的意味があります。日本語の「雪が降る」という表現は人間じゃないものが主語になったりします。無生物が主語になる場合、アングロサクソン、英語の構造は必ず動詞は transitive verb、すなわち他動詞、目的語を必要とし、さらに目的格補語を必要とするシンタックス(構文)という構造があります。私はチョムスキーからそういう統語論を教えられ、それを、語学を教える時に活用しています。

## ● 地を支配するのではなく世話をする

岩村：キリスト教会は 4 世紀頃に地中海沿岸でできました。地を「治めよ」、「支配せよ」という聖書の言葉を間違えて理解してしまったために、自然を破壊する、攻略する、自然から搾取するということを平気で行ってきた歴史があります。しかし、「支配せよ」と訳したヘブライ語(רָדָד *radad*)には「世話をする」の意があります。ちょうど「教育する」と「育む」のディスタンクシオン(distanciation)を考えたのと同じです。ラーダードゥは、「世話をする」であって、「支配する」(dominion *ドミニオン*)ではないのです。大地の世話をするということです。エゼキエル書の 34 章の中で、2 節から 5 節まで読んでみたら同じようにラーダードゥの使い方がわかります。羊飼いが、羊たちを世話するように、この農地を、私たちが世話をする、優しく世話をする、公害を起こさない。ですから、無農薬有機だから、メダカがいてドジョウがいて、5800 種類の生き物がいるから、農業はいらないわけです。農協さんが使うネオニコチノイド系農薬はいりません。ビオトープって言う農業は去年、ドイツでは保護条例によって禁止されるようになりました。虫は殺すが、人間は大丈夫というビオトープって言う農業を使ってはいけなくなりました。日本では平気で使いま

す。お米に全てネオニコチノイド系農薬という、昆虫は殺すが人間には害のない農薬を撒いて、日本中の農家はそれを購入して育ててるわけです。ですから、ほとんどメダカや、ドジョウ、タガメはいなくなりました。

### ●「田・山・湾の復活」

岩村：私達は「田・山・湾の復活」(レストレーション) っていう旗印のもとに、2000人近くが神戸から被災地にすぐ飛んで行って、ひとびとに仕えてきました。奥山から里山への循環を語ると、若い人は奥山、里山の意味が分かりません。例えばちょうちょは奥山には飛んでいません。シカや熊などは奥山にはいますが、里山にはいません。里山には桃とか柿とか栗とかの果樹が実ります。奥山、険しいフォレスト forest。フォレストには果樹というのは見当たりません。そして現代、里山がなくなっています。奥山から清水が湧き出て地下水となり、里山を通して、小さな「春の小川」(畔の狭い水路) になり、田圃に流れ込みます。水田では約 5800 種類の生き物が育まれています。「里川」(limpid river) になり、やがて河川 (river) になります。里海に有機物を運びます。いきなり海に行くのではないんです。里海というのは、昆布とかわかめとか、海藻 (seaweed) が育つてそこに魚たちは卵を産んで、ゆりかごのようにして、小魚たちはそこで育つて、やがて大きくなって、今度は大海原に出かけていきます。この自然の循環について聖書は、今から 2300 年ほど前に書かれたコヘレト 1 章 7 節は書いています。

### ●生態系の循環の回復

岩村：「確かな未来は、昔ながらの全ての川は、海に注ぐが海は満ちることがない。

どの川も行くべきところへ向かい、絶えることなく流れ行く」(『聖書協会共同訳』)。

すなわち、「海は満ちることがない」。なぜでしょうか。

それは蒸発して、やがて雲となって、やがて雨となって、奥山 (forest) で、地下水として地表に染みこみ、腐葉土をつくります。里山 (Satoyama “undeveloped woodland near populated area”) の地下水から湧き出て、「春の小川」から田圃に流れ込みます。人間が、土から芽生える食物で生活を営むことができたのはそうした循環のおかげです。やがて里川 (limpid river) が河川となって、今度は里海に流れ込むからです。この里山、春の小川、里海という言葉も、もう日本では死語。今や忘れられています。

すなわち、自然というものを世話するという、本来のゾーエー、命を持っている。一生命ではなく一命を持っている人間が少なくなりつつあります。工業の発展、技術社会、宅地開発によって農林業に就く後継者がいなくなりました。自然をどのように取り戻したらよいのでしょうか。

私たちは、生態系の回復のミッション、を携え、海外にも出て行きます。宗教の視座では、「復興の神学」“The Theology of Restoration” です。

そして兄弟・姉妹関係の新しい共同体を作っています。孤児、夫をなくした独身女性、難民と一緒に生きていく。そんな歩みが、神戸国際支縁機構のはたらきです。

一昨日ここへ来る前に、カメルーンの一人の人と facebook の友達になりました。カメルーンという国について私は一度も行ったことはないですが、真っ黒な人ですね。茶色系ではなく真っ黒な方です。イエス・キリストも膚の色は黒かったと私は思っています。でも私は子どもの時からローマ・カトリック教会 3 代目で育っているときに、イエス・キリストは金髪で目が青く、そして白人である絵などを見て育ってきました。しかしそれは正しくありません。なぜならイエス・キリストはオリエントの人間ですから。生まれながらのユダヤ人です。ユダヤ教ではエチオピアの真っ黒な人でもユダヤ人というんです。イエスは、肌の色が黒い。そのことに共感していなければ、アフリカのひとびとの民族紛争、餓死、飢餓、苦しみ、悲しみ嗚咽ということに感情移入することはできません。

ですから、ウクライナの問題ばかりが取り上げられています。しかし、ウクライナよりもっと苦しい生活を余儀なくされているのは、食べるものがなく 1 年間に 8 億 2800 万人が飢餓状態。そういうところに、私たちは、農、林、業を始めとして「田・山・湾の復活」がどのようにできるか。



民族、宗教、国籍に関係なく、神戸国際支縁機構はそういった人々で、働きを継続していくわけです。皆さんにも是非共振、共感、体力を貸していただいてこの働きが、いがみ合い殺し合い傷つけ合いの犠牲になっている、中東やまたアフリカ、アジア、南米の人々のところに一緒に出かけ、少しでも一人でも多くの人々に、仕えていく輪に加わってください。ぜひ、Give me your hands, will you? ということで、わかりにくい話をしましたが、忍耐して聞いていただいたことを感謝したいと思います。あとは文句コーナーの時間に移りたいと思います。クリティックしていただきます。

## ● 質疑応答

**司会：**ありがとうございます。いつも、週に一度、岩村牧師は、日曜日に午前中にこういう形で説教をすることもあるんですね。話の後では、必ず今の文句コーナーというのが設けられまして、信徒の方から文句が一人ずつ、言わなければいけない時間があるという。

**会場：**言わないといけない… (笑)。

**司会：**(笑) そうです。

**岩村：**お祈りがありません。祈りは行動ですから。

**引率教員：**皆さんいかがでしょうか。

**司会：**世話をするっていう話は、実はこの三日間で、あとその先ほどの話の中で、つながる、キーワードかな、という風に思っています。私は三日間を過ごしてまして。例えば、昨日、川漁師の方に話を伺ったんです。私は文句の模範を見せつつ、学生さんに多分文句の番を移すことになります。昨日ちょうど学生(学生2)が中国の1000年前からあるダムのお話をしてくださっていました。学生(学生2)が昨日までの二日間で感じていたことが、もう作ったら、それでももう終わりなんだという発想をし過ぎなんじゃないかという指摘をしてくださってましたね。私は連想してさきほどのフォスターのお話を繋げてたんですけど。よかったら学生(学生2)さんは1000年前のダムのお話からだったらいいですか。

**学生：**四川のチョンドル(成都)の隣に、都江堰とこうえんという1000年前に作られた天然ダムみたいなものがある、それが当時のひとの力で作られたもので、でも毎年もう必ず更新作業をするので、今の情報では、もうハイブリッドとか、コンクリートとか、他にもいろいろ材料入ってる。今は複合とかそういう新しいダムにはなってないですが、材料は必ず毎年更新しますので、このまま今でも四川省に大きな役割を果たしている。1000年前のダムが今まで使えるのが、もう毎年更新とか建て替え作業は必要なんで、でも、ダムとか数十年前に建てられたダムがそのまま工事するという感じが多くて、あの原発ももうそのまま、たとえば福島、当時も70年代から作られた後に、そのまま使えて何も更新せずに、最後に津波が来て事故が起こしたという感じがすごく強くて。

思想的には現代的な思想ではとにかく建てれば大丈夫という感じが強くて、毎年更新とか維持とかそういう作業をしないとイケないかなと思ってます。

**岩村：**ありがとうございます。私も2014年に、スーチョアン(四川)で地震があって自然災害があったときに一人で、百元だけ持って、リュック担いで寝袋で、ボランティアに行きました。ちょうど、対日感情が非常に悪く、日本も対中感情が悪い時で周りの人々が皆行かないように言いましたが、私ヒッチハイクで行くつもりで上海から乗り継いで、行きました。その時に私は一番大きなインパクトを得たのは大禹たいうです。

彼が人民のために、自然のものをういて、水害を防ぐことを努力した。そのことは日本において、日本では130以上にタイウ(大禹)先生を祀る治水碑、地名があります。ご存知ですか。ということは、日本も水害がずっと昔からあるわけ。

**学生：**はい。

**岩村：**その時にどうやって水害を防ぐかというときに、大禹先生から学んで、水のある時には極め

※ 汶川(ぶんせん) 県中心街から帰途に就く時、「大禹(たいう)王」(中国最初の王朝「夏」の創立者)の巨大な像を見ました。禹王は毎年のように氾濫する黄河(こうが)の治水事業で名を馳せたのです。

て怖いけれども、どうやって人間は生物のビオスではなく、自然界のゾーエの生態、保護、世話を  
して安心をもたらすことができるか。それでそういうこと意外と知られてないんです。日本人もそう  
いうことを忘れてしまって、今おっしゃったように例えば、市房ダムが放流したことによって52名  
のかたが亡くなってるわけですね。放流したことを認めないですけど。大事なことは国土交通省  
(国交省)の役人が、ダムを作るにあたって条件をつけてるわけです。今、作ったら作りっぱなしじゃ  
なくて、掘削する、堤防を高くする。すなわち、ダムというのは2~3年以内にすぐに土砂が堆積  
するんです。例えば砂防ダムは一箇所作ったら2年したらもう砂でいっぱいになって効き目がなく  
なるから。また、そのすぐ上につくるんです。だから一つの山で200も300も作る場合もあります。  
作るという事によって、コンクリートで作るから、石ではないんです。石で作る昔ながらの石堤だっ  
たら大丈夫なんです。砂も石組みのすき間から流れますから。ところが、堰き止めてしまいますから。

そして、コンクリートだと生き物も遡上できないわけです。ニジマスも、シャケも、あゆも。だから、  
今度ここに五木の方にダムができれば、日本一大きい尺鮎と呼ばれる30cm近くの鮎が捕れて美  
味しい所なんですけど、もう鮎が食べれなくなる。

中国で、私たち日本人の先生である中国の先人。3000年4000年かけてできた知恵を、日本  
人は謙虚に学ぶだけじゃなしに、それをちゃんと保持、世話、共生していく。そのことについて気  
づかないと、日本は滅びると思います。仰る通りです。ありがとうございます。謝謝。謝謝你。

**中国籍学生：**(笑)

**岩村：**感謝。

**中国籍学生：**カムサハムニダ。

**会場一同：**(笑)。

**岩村：**ハングルマルできるかたい。(笑)。

**司会：**はい。何の感謝をしていたんですか今は。

**岩村：**作りっぱなしじゃダメだっていうね。

それは城壁の破れ口を修復する(イザヤ58:12)というのが、聖書の中に書かれてるので。破れ  
口を修復するということはとても大事なんですな。

**引率教員：**他のかたがたは。

**岩村：**クリティック、クリティック(クリティックをお願いします)。

**学生：**今お話を聞かせて頂いて、いろいろすごい勉強になった。田山湾の復活って(言っていたと  
思うが)。元々聖書では地球の世話をするって言ってましたよね。一方で今の社会って、いわば資  
本主義と言うか、工業化された上でもう成り立っているものじゃないですか。僕すごく難しいなと  
思っていて、いろんなかたのお話を聞いてダムはよくないよねとか、自然が重要だよってという話は、  
理由もすごく納得できるし、そうだなって思う一方で、社会の中の経済の格差であるとか、階層の  
格差によって、自然があった方が一番いいよね、ただそれで生活がなりゆかないってひといるん  
です。その兼ね合いってどういうふうに見て行けばいいのかなっていうのは数日間も自分の中  
では、考えてたところだと思うんですけど。先生はどう思われますか。

**岩村：**そのメディテーションは、非常にいいところを突いておられますね。今度リヨンに行かれる  
わけですが、パリとリヨン。ワインの産地でもあります。フランスは、資本主義と言わずに、今  
は新自由主義経済。すなわち、経済格差から、階級社会になってるわけですね。貧富の差が非常  
に大きくなっている。これ貧富の差が大きくなっているなかで、フランスの農業に就労している割合、  
そして日本の農家を受け継いでいく人の割合というのは、フランスは70%。で、日本はもう30%  
切っている。そして、日本は農家に従事している平均年齢が高いんですね。後継者がいないです。から。  
70代です。そうすると、20年後、30年後を考えると、今、新自由主義経済でこのまま日本は進  
んでいったら、自給自足することはできなくなる時代ですよ。そうすると、軍備は国家予算の5  
兆円を突破して、GNPの2%を増やしていくという政府の方針に対して誰も抗うことがない。そう  
したなかで、農家はますます、また、林業漁業に従事する方もいない。となると、自分の首を絞め  
てるわけですね。私は20代の時には、日本の安全保障について偏った見方に陥っていました。当時、

日本は石油を1分間に50万トン消費するゆえに、石油は大切な資源でした。ところが、マラッカ海峡をタンカーが通れない事態が生じると、日本の経済が止まってしまうという危機感を鷓鴣みにしていました。今から40年前。しかし、石油が入ってこないよりも、ABCD包囲陣によって、1940年12月8日に「トラ、トラ、トラ」で真珠湾を攻撃する時に、なぜ攻撃したかというのはハルノート。すなわち、包囲網でもって輸入ができなくなる。しかし、今日本の権力者は軍事を強くすれば、日本は守れると民を操縦しています。隣国の脅威。朝鮮民主主義人民共和国や中華人民共和国からの攻撃があった時に、尖閣諸島をどうやって守るかとか。そのために軍備を強くしようとしてきた。しかし、今、大事なものは「田・山・湾の復活」だというのはなぜかと言うと、軍事安保よりも「食料安保」の方が大事だからです。そして食料安保をいかに大事かという意識。そういう民衆の意識を持つことができるかというのは、石を一つ一つ積み重ねていく心もとない作業です。変えていこうとするモデルがなかったら、みんな無関心、無知、無責任なわけですね。だからそういった意味では、気が遠くなるほど新自由主義経済をひっくり返すということは到底不可能のように思えても、誰かがやらなければ。このままジリ貧で、日本はもう世界の地図から消えていかざるを得ない。

そして、まず、エコロジーです。エコロジーというのは生態ですね。さっきもメダカがいましたが、今はもうメダカは見ることはできません。ヒメダカという赤いメダカは見ることはできます。本メダカ、黒いメダカは今日本中どこへ行っても、ほとんど見つかりません。エコロジーというのはエコノミー。エコというのは、ギリシャ語 οἶκος (オイコス oikos) という「家」からできてます。家の経済というのが成り立たなくなっている。すなわち、新自由主義経済では弱肉強食で強いものが、弱い人の人権を顧みることなく、オプレッションを続けて行って搾取していく。この構造というのは、やがて自分たちの首を絞めることになります。

本来のエコロジー。Economics (経済) オイコノミア → エコロジーに基づいて、Economics (経済) を建て直し、オイコス (家) つまりこの地球という家をどうやって正しく世話をするか。管理するとか支配するのではなくて世話をするか。Foster するスピリットをどこから、タイダルウェイブ tidal wave (潮流) を起こしていくか。それは気づいた人たちから。それはどこからか。僕は最も貧しい地域だと思っています。アフリカ。ウクライナでは650万人が難民となったというけれど、コンゴで虐殺されている人々の数はそれ以上です。でも日本をはじめ西側諸国のメディアは取り上げません。こういう矛盾というものに対しては、私たちはどう考えていくか。

ただ、このまんまでは、この権力者、政・官・財・学・メディアの権威あるオーソリティの搾取、抑圧、虚偽、矛盾というのを解決できない。ただ、指を口にくわえて見ているだけでは傍観者であってはいけません。アウトサイダーではだめ。まず、さっき言いましたが、私たちの教会は最後に文句コーナーがあるけれど、祈りが自己満足、自己救済、自己陶醉で完結してはなりません。祈りは行動に直結してはじめて力を発揮します。Action now! Act Now が、やっぱり、いま、世界で、必要なんじゃないでしょうか。冷静に考えてみたら今の世の中どう〜考えてもひっくり返すことはできません。

**学生：**ちなみにですけど、すごいあれ、基本的なんかキリスト教じゃないですか。

**岩村：**ヒエラルキーのキリスト教では、怒り、苦しみ、くやしきのある最も「小さくされた人々」は解放されません。もちろんです。

**学生：**クリスチャンではない？

**岩村：**ビックリスチャンです。

**学生：**ビックリスチャン。

**会場：**(笑)

**岩村：**キリスト教世界でいうのは4〜5世紀に地中海へ出てる。ヒエラルキーができてるんです。ローマ教皇とか。バチカンね。ヨーロッパがそうでしょ。非英語圏。でも欧「米」ではなくて、英国と、アメリカは、これアメリカ教とってね。一つのヒエラルキーあるわけです。大統領とか。エリザベス女王やビリー・グラハムのような預言者。そしてロシア、ウクライナは、正教というヒエラルキーを持ってます。ほとんど、キリスト教ってのは権力というのがあるわけです。エクスーシア。権力が。

権力の中にある、従順な人びとはそれに従わざるを得ない。でも私たちは、そういう教会の中の権威、権力というのを認めないわけ。権威はイエス・キリストだけにあるっていう。イエス・キリストは「剣をとる者は皆、剣で滅びる」と言われたわけですから。そうずっと自ずと、日本の自民党の政策とかいうのには NO という立場です。

**学生：**なんか最初勘違いしてて、キリスト教なのかなっていう風に勝手に思ってて、そうなったときに、なんかそのキリスト教のいろんな宗派があるところの位置づけどうなのかなとか、教皇のいう聖書の解釈と、先生の言った聖書の解釈が、どうなのかなって思っ…訊こうと思ってたんすけど、そもそも違うんすね。

**岩村：**僕は異端ですが、周囲の人はおんなじだと思ってますね。

**学生：**(笑)

**岩村：**キリスト教という言葉は聖書にないでしょ。だから私たちはキリスト教徒と言わずキリストの道に属する者。道、ボランティア道。道ですね。禹王は武器の生産を止めさせ、田畑を保護し、農民たちから信頼を得た。日本の権力者も、そうした禹の治水、非戦、農民をたいせつにする賢人の思想を学ぶべきですね。水害に対して大きな功績を残した方の足跡を、踏みしめていく道ですね。それを日本で実現していかないと日本人は感謝することを忘れて自分たちが作ったものに、安易に依存してしまって、そしてあぐらをかいていて技術に過信している。でもその技術に過信していたらダメなんですね。ニムロデの時からバベルの塔みたいに作ってですね。傲慢になってしまう。もっと謙遜にならないといけないと思ってね。三峡ダムだって世界一のダムと言ってるけれど、ほとんど人民日報でも、最初は反対してるし、毛沢東でも反対してたわけですから。しかし日本の、ハイδροマフィアや日本の大企業、銀行が応援してるし、三峡ダムができた裏付けの内容は日本の技術者たちが暗躍しています。そういう狡猾な日本のテクノクラートっていうのが原因で、やっぱり、世界で大きな問題が起きている。だから、北朝鮮でも、国旗はダム。水豊ダム。ラオスでもダムが国旗の中にあるんですね。でもこれは日本の戦前からのテクノクラート。官僚と技術者たちが一致して、推進して行って、技術が優れたら、人間は幸福になると思ってる思い上がりですね。だから私たちは機械を使わないでしょ。神戸国際支縁機構では、一般的な「田んぼ」より「田圃」という表記を用いて区別しています。農機械を用いないで耕作する田は「田圃」という古い漢字を用いています。コンバイン。みんな機械のために働いてるでしょ、農家の人っていうのは。

**学生：**設備を大きくするために働いて、さらに新しい設備とか大きくして、その大きくしたものを維持するためにもっとはたらいで、それをまたさらにもっと大きくして…そういうのと繋がってくるのかなあと。

**司会：**それもあると思いますし、現実的な問題として、さっきもタバコ農家の話をしてて、後継者がいないって話もしていましたが、たばこ農家だってそうだと思うけど、たくさん土地を管理ですよね。管理をするときに、機械をやっぱり使わないともうできない。もう少人数で70代で一人で何ヘクタールも(作業を)する…ときにはもう機械を使う。そのときにでも、じゃあ機械はどうやって買うの?って、思ったときに、お金は(農家ひとりでは)一台を買えるお金なんてない。それほど収入があるような豊かなところでない。普通の兼業農家みたいなところの場合は、日本は農業の組織がありますけど、そこから(機械を)借りるとする。借りるのも結構お金がいると。その(機械を)借りるお金のために、農業を使った作物を売って、それ(機械を借りる代金)を支払って、でもそれ続けていくためには借りてるから、返し続けられないといけない。そのために、働いている。それってそういう悪循環を(繰り返している)。

**岩村：**私たちが、全て行動してることの指針というか、どういう方向で行くかって時に、全て聖書言葉に基づいてやってるんですね。キリスト教ってなると、ヒエラルキー、組織の中に入ることになるんですけど、キリスト「教」ヒエラルキーを否定。否定しながらも、ただ書物聖書は読んで、そこに基づいて行動してると。ただしヒエラルキーを否定しますから。アナーキーな牧師と非難されています。

言ってしまいましたね。(笑)。

**学生：**僕個人的には宗教（のこを）学問としてはすごい好きなんですけど、経験としては決して宗教ってというのはあまり得意でないですね。

**岩村：**（僕もあなたと）おんなじです。

**学生：**ブラジルに小さいときに見た宗教とあんまりしっくり来なかったっていうのが正直なところなんです。宗教はその組織に所属しなければならないみたいな、そのなんていうんですかね。そういうものだみたいな感じだった、ていうのがちょっとあって、そうなったときに、その宗教例えばキリスト教を信じないけれども、その精神はこう実践していく。

**岩村：**（僕もあなたと）おんなじです。

**学生：**あー。じゃあ特に例えばそれこそ先生の教会に行かなくても。

**岩村：**実践していれば。いわゆる、キリストの最も小さな兄弟、抑圧され、差別され拒否されているそうしたキリストの最も小さくされた兄弟、そうすると、クリスチャンでないかもしれない。でもさっき黒人のこと言いましたが、共に生きる。連帯して生きる。ですから組織っていう言葉はいらぬ。聖書に組織ということばはないでしょう。その組織に属しなさいって聖書に書いてない。イエス・キリストは一人としてあなたもクリスチャンになりなさいなんて言ったことないですよ。神道を信じている人、仏教を信じている人に、キリスト教になりなさいなんて、イエスキリストは一か所も、そういう伝道したところはないでしょ。でも、宗教っていうのは伝道することによって、外にぐぐぐと（出て行くから）そこのグループに属するっていうことが、大切になってくるわけです。でもそういうのは聖書に裏づけがないですね。

**学生：**むしろ聖書読んできるとアナーキーなたとえですよ（笑）。イエス・キリストは。私、中学生のとき、キリスト教系だったので、けっこう聖書…（親しんだ）。

**一同：**あーそうでしたか！

**岩村：**（岩村がアナーキーだということを）あんまり暴露してしまったらだめなのよ。

**司会：**あ…そうか…すいません！

**岩村：**（笑）。

**岩村：**キリスト教の中で「異端」ですからね。心が「痛」んでますから（注：「いたん」で言葉をかけている）。今世界で一番のクリスチャンが多い国どこかご存知ですか。

**岩村：**圧倒的に多い国があります。クリスチャンの人口。

**学生：**人口的に中国とか…？

**岩村：**そうですね、中国ですね。ですから、10年後20年後にはどうなるかわかりません。迫害されていないけども、これからどうなるかわかりません。キリスト教はヒエラルキーを認めている宗教だから権力者同士が手を結ぶことだってあります。キリスト教では。私たちの働きと違うから、これからどうなるでしょうね。アメリカ（が）ちゃちゃ（を）入れてきますからね。クリスチャンが多い国だから、中国の海外進出多いでしょう。アメリカが黙っていないですから、おせっかいですからね。世界の正義の警察官みたいな顔をしているから、余計なことしますでしょう、すぐに。今回のウクライナなどの問題もそうですけどね。

---

## 6. おわりに

---

未来共生プログラムの誕生と成長において東日本大震災後の東北各地での活動は言うまでもなく非常に大きな意義を持つ。自然災害の現場における長年の研修では、教育や宗教、防災などそれぞれの観点から取り組みが行われ、学生と教員は21世紀における「共生」という課題は常に人と自然とインフラの関わりの中で現れるということに共に気付かされてきた。本報告書は東北研修で見出された問題意識を真剣に受け止めつつ、日本列島の反対側に位置する熊本県相良村での現地調査をきっかけに、攪乱された自然環境の力を生かす暮らしの可能性を探っている。東北研修の企画に直接関わった一人の教育者として幸せな読み物である。

地域研究やコミュニティ調査の範囲に留まらず、現場で身につけた課題を再び大阪に持ち帰り、実践者でもある大学教員の保田茂氏と共に考え続けたことも、特に注目に値するものである。近年、文理を問わず、従来は人間社会を対象としたあらゆる学問で、環境破壊や気候変動に関する論争は年々盛り上がりを見せており、地球を共に生きる人間と動植物との相互関係が再認識されている。原発事故が残した公衆衛生とエネルギー危機の遺産から、化学肥料の過剰使用による土壌や河川などの富栄養化まで、人間が作り上げてきた産業化の廃墟が、私たちの生活の基盤となってきたことは、近未来の共生社会の鍵を握る状況であろう。

3回にわたった活動の報告で詳しく示されているように、このような人間と地球環境との衝突は昨今始まったばかりのものではない。熊本県出身の緒方俊一郎氏と関西を活動拠点とする保田氏の語りから、日本における共生運動の誕生は水俣病とその科学研究の歴史に密接に結びついていることがわかる。つまり「自然の回復」は、少なくとも戦後の日本では常に人と人との共生を前提に考えられてきた。それどころか、農業や医療に不可欠とされるイノベーションが、予期せぬ形で公衆衛生や食物連鎖など、人間と他の生き物との関係を地球規模で変化させていることは興味深い。これは共生を問い続けるわれわれも無視できないことであると同時に、上記の研修から私が得た主要な示唆である。

人間は多種多様な動植物と共にこの惑星を生き、その未来を共に創っていく。しかし環境問題が顕在化する中で、ダムづくりから養蜂まで、人間の活動が地球の気候に与える影響は、主に生態学者が追究してきた上述の相互関係を根本的に変えてしまうのである。第4章の質疑応答で緒方氏は「これから先地球がどうなるかわかりませんが、少なくとも今の状況を続けていけば水不足で大変なことになるのではないかと思います。」と述べていた。本研修の参加者たちが、このような問いをかかえながら、九州と関西での多様な背景を持つ方々との出会いをきっかけに、地球と共に生きることにしてもより具体的に学ぶことができたことは心強い限りである。

未来共生プログラム (大阪大学大学院人間科学研究科 准教授)  
モハーチ ゲルゲイ

---

## 7. 編集後記 (謝辞)

---

本冊子を作成するにあたり、講師を快く引き受けてくださった緒方俊一郎氏、岩村義雄氏、保田茂氏に御礼申し上げます。

熊本研修で温かく迎えてくださりお話をしてくださった相良村の皆さまには大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

企画にあたっては、大阪大学人間科学研究科未来共生プログラムの榎井縁先生にご協力を賜りました。お礼を申し上げます。そして、本研修に関心を持った学生の皆様、講演会にご参加くださった聴講者の皆様に心より感謝いたします。

本研修は学生にとり、社会正義について、社会での実践についても良い刺激を受ける機会となったと自負しております。多様な背景を持つ方からの、多様な意見を、本報告書にて反映することができました。本報告書を手にとった方々の、無知、無関心、無力感から問題への共振、感情移入、参加するように共感につながれば、幸いです。

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・未来共生プログラム 特任助教  
王一瓊、佐々木美和

未来共生セミナー volume 19



---

## 自然の回復、ひととの共生

2023年3月発行

編集・発行 大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター  
未来共生イノベーター博士課程プログラム  
人間科学未来共生博士課程プログラム  
「学修証明プログラム」人間科学研究科 未来共生イノベータープログラム  
大学院副専攻プログラム 未来共生イノベータープログラム

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-2

人間科学研究科棟東館 105

TEL : 06-6105-6490

E-mail : [info@respect.osaka-u.ac.jp](mailto:info@respect.osaka-u.ac.jp)

Website : <http://www.respect.osaka-u.ac.jp>

制作／印刷：有限会社ブックポケット



未来共生セミナー volume **19**

# 自然の回復、 ひととの共生

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター  
未来共生イノベーター博士課程プログラム  
人間科学未来共生博士課程プログラム  
「学修証明プログラム」人間科学研究科 未来共生イノベータープログラム  
大学院副専攻プログラム 未来共生イノベータープログラム



**RESPECT**

Revitalizing and Enriching Society through Pluralism, Equity, and Cultural Transformation